

民俗芸能・その変容と伝承

荒木 一・工藤 一紘
懸田弘訓・板谷 徹 (司会)

民俗芸能をテーマとする舞踊学会の二つのシンポジウムは、一方を「近代と変化」とし他方を「その変容と伝承」として設定された。変化も変容も多くの近代のなかの問題であってテーマの差異をどう捉えるべきか、また今日の民俗芸能が必ずしも正統的な伝承者ではない人々に拡散して伝承されるなかでその正統性が問題となるのか、以下のシンポジウムが企画者の意図を十分に理解しないままの内容となったことは司会者の責任である。

最初の報告は工藤一紘氏であった。氏は永年にわたって秋田県の高校で教鞭をとり、県の高校文化連盟で民謡や郷土芸能を高校生に指導し、舞台発表を行ってこられた。

高校文化連盟での民謡や郷土芸能への基本的な対し方は次の三点に要約される。

- ① 芸能の物真似ではなく、芸能の歴史を学びながら「地域のトータルなもの」として芸能に接する。ここには「ピンセットでつまみ取るようにして」学校で扱っても良いのかという謙虚な反省を伴う。
- ② 優れた指導者と直接に出会うことにより、「芸能を支えてきた庶民の歴史そして心意気」を体験する。
- ③ 「高校教育の持つ規律性、組織性の発揮」

これら三点を通して、幼児から地域に育って芸能に慣れ親しんだわけではない高校生がある地域の芸能を伝習することの意義が浮かび上がる。氏は「古いしきたりを大事にする『民俗』」と「常に新しいものを作り出さずにはいられない『芸能』」との矛盾を認識した上で、高校生による新しい民俗芸能の魅力の創造が可能なのだとする。民俗芸能が常に若者と出会うことによってその生命力を更新するという民俗的事例は多いが、ここではその若者の力を必ずしも民俗的な文脈のなかにあるのではない高校生に期待するのである。

次に報告されたのは同じ秋田県を本拠として民俗芸能を舞台に再創造する仕事を続けているわらび座で、その材料を提供するための調査を担当されている荒木一氏であった。1959年からのわらび座の民俗芸術研究所における調査のなかで多くの民俗芸能の消滅に出会い、その原因を農業の形態の変化によって宗教的基盤が民俗芸能を支えることが不可能になったことに求めて考えられた。高齢者と年少者が民俗芸能の主要な担い手となった

現在、二つの方向で変化のきざしが認められる。ひとつは見て楽しむ芸能への変化で、これを主体的な変化とすれば、もうひとつは民俗芸能に商品的付加価値を見いだしていくという外的変化である。後者は村おこしに利用されるなど観光資源として外部から促される変化である。いずれにせよ変化は必然であり、方向の主体的な選択のためには従来の民俗学中心の研究から音楽・舞踊・演劇的な研究の必要性を指摘された。

最後に報告された懸田弘訓氏は、福島県で学校教育にたずさわりまた文化財行政にも関わった研究者である。おもに福島県の事例によって民俗芸能の変容の実例を示された。民謡の会津磐梯山は小唄勝太郎が小原庄助さんの囃子詞を入れた端唄会津磐梯山がレコード化されて流行したために本来の会津磐梯山が歌われなくなってしまい、またナンバを特徴とするかんしょ踊りは終戦後に踊りに伴う風俗が好ましくないものとされてかんしょ踊り撲滅運動が起こって上品な振りの踊りに変わった。

昭和30年代の新生活運動は民俗芸能にも大きな影響を残したが、なかでも青年が女装して家々を回る田植踊りは、青年団活動の低迷とともにその担い手が青年から中年の女性に代わり、さらに最近では小学生が踊ることが多く見られるようになった。

民俗芸能を子どもが学べば、伝統的なわざを経験させることによって行動様式や動きのバランスを体得するのに重要なのだが、民俗芸能は基本的に地域のものであり、伝承する地域を越えて学区が設定されている現状では学校教育のなかで民俗芸能を取り上げることは難しく、さらに芸能であるための困難さも加わる。

三氏の報告は民俗芸能の伝承における学校教育との関わりと民俗芸能からの新たな創造一自己の再創造と新たな場での創造を含む一という問題を提起されたかと思う。これに関連して会場からは伝承のなかでの教授システムを問う発言などがあつた。

※この原稿は記録テープをもとにして、このたび新たに作成したものです。

(文責・板谷 徹)

*1997年度春季第43回舞踊学会